

兵庫医科大学病院「妊孕性温存」相談室への紹介要領

【はじめに】

手術・化学療法・放射線治療等の進歩により、若年がん女性の社会復帰の可能性は高まりましたが、副作用により妊孕性を喪失することがあります。近年、生殖医療の進歩に伴い卵子・胚・卵巢組織を凍結保存することで、このような女性の妊孕性を温存することが可能となりました。一方で妊孕性温存のためにがん治療が遅れ、予後の悪化が懸念されることも事実です。そこで生殖医療医と各科のがん治療医が緊密に連携できるよう、2016年1月に「兵庫県がん・生殖医療ネットワーク」を設立いたしました。このネットワークへのご紹介の際には、別紙『兵庫医科大学病院「妊孕性温存」相談申込書』を御利用ください。

【対象患者】

1. 若年のがん女性が主たる対象となります。良性疾患でも化学療法を必要とする患者さんおよび免疫疾患患者や付属器腫瘍・付属器炎の患者等も対象。
2. 手術、化学療法、放射線療法、ホルモン療法など卵巢毒性や卵巢機能抑制作用のある治療を予定している患者。
3. 患者および後見人（未成年者の場合）に挙児希望、妊孕性温存の希望があり、兵庫医科大学病院で「妊孕性温存」相談を希望していること。
4. 妊娠可能年齢の女性（閉経前）、および性成熟前の女児であること。
5. 妊孕性温存処置に原疾患の主治医の許可（予後や時間的に）が得られていること。

※ご紹介を頂いた患者様につきましては、妊孕性温存の適応がある方と考えて対応させていただきます。

【妊孕性温存処置の特徴】

妊孕性温存処置の方法を表1に示す。

- ・現在広く行われている技術としては受精卵凍結や卵子凍結です。これらの方法は排卵誘発が必要で約1ヶ月を要します。月経のない小児がん患者は対象外です。
- ・卵巢凍結保存は月経のない小児がん患者にも適応があります。排卵誘発が不要で約1週間程度でがん治療開始が望めます。排卵誘発の時間的余裕のない患者の適応として注目されています。
- ・凍結した卵巢に微小残存がん病変が存在することがあります。この場合、卵巢移植により再発の危険性が指摘されていますので、より安全に卵巢から未成熟卵子を回収し、体外培養後、体外受精を行う方法があります。

【表 1】

	胚（受精卵）凍結	卵子（未受精卵）凍結	卵巣凍結
利点	妊娠率が比較的高い	未婚にも適応 (精子は不要)	・思春期以前にも適応 ・排卵誘発が不要 →早期にがん治療可能
欠点	排卵誘発が必要 (がん治療の遅延) 精子が必要	排卵誘発が必要 (がん治療の遅延)	・手術（基本：腹腔鏡）が必要 ・移植の際に腫瘍細胞が混入 するリスクがある

【紹介の手順】

1. 「妊孕性温存」相談の実施にあたり、兵庫医科大学病院生殖医療センターでカウンセリングを行いますので、受診には必ず予約をお願いします。
2. 『兵庫医科大学病院「妊孕性温存」相談申込書』を当院の地域医療・総合相談センター宛にファクス（FAX：0798-45-6002）にてお送り下さい。
3. 当日中に来院日時のお知らせ（予約受付票）を FAX にて返信いたします。
但し、紹介 FAX 受付時間は月～金の 8：30～16：30 です。受付時間外にご送信いただいた場合のご予約日等のお返事は、翌診療日の受付時間内になりますのでご了承ください。
予約枠は月～金の 11:00～の 1 枠になります。申込書に相談希望日時を記載して下さい。
4. 患者さんの状況が複雑な場合や記載内容がファクスでの送信に適さないような場合は、あらかじめ下記担当医へ直接お電話でご相談ください。
5. 患者さんにお渡しいただくもの
 - ・兵庫医科大学病院からの（予約受付票）（受診日時を記載したもの）
 - ・紹介状（貴院で使用されているもの）
 - ・別紙『兵庫医科大学病院「妊孕性温存」相談を御希望の患者さんへのご案内』

【「妊孕性温存」相談後】

1. 希望があれば兵庫医科大学病院に通院のうえ妊孕性温存処置を行います。
尚、「兵庫県がん・生殖医療ネットワーク」参加施設での妊孕性温存処置を希望される場合は紹介状を作成します。
2. 妊孕性温存処置施行後、原疾患の治療を開始します。
但し、原疾患の治療を開始しながら妊孕性温存処置を施行する場合があります。
3. 原疾患の治療が終了し、患者からの要請と原疾患の主治医から妊娠の許可が得られた場合には、妊孕性温存処置を施行した施設で凍結した受精卵・卵子・卵巣組織を融解し妊娠に向け移植の準備を行います。

【紹介に関わるお問い合わせ先】

〒663-8501 兵庫県西宮市武庫川町 1 番 1 号

兵庫医科大学病院 産婦人科医局（担当医：柴原浩章，脇本裕）

電話番号：0798-45-6481 FAX 番号：0798-46-4163